優秀賞

真っ直ぐ、生きる

福島県立会津学鳳中学校
一年　今村真生

私は、毎年誕生日に母からきまって聞かされる話がある。私の生まれた時の話である。毎年のように同じ話を何度も聞かされているので、もう聞き飽きてしまっているし、今までは「また始まったな。」としか思えなかったのだが、十三歳の誕生日を迎えて、改めて考えてみると、これが私の生きている支えになっているのだと思うようになった。

私は、三十六週で産声を上げた。三十六週といえば、もういつ生まれてもおかしくない時期ではあるが、私は母のおなかの中で大きくなることができず、たったの千八百六グラムという小さな体で生まれてきた。本当に小さな赤ちゃんで、腕も足も細くて、ふにゃふにゃしていたそうだ。でも小さな体で、とても力強い産声を上げたことを母は今でも鮮明に思い出すそうだ。

これは、平成十七年六月十日の話である。その日母は、たまたま検診日だった。私の体が大きく育っていなかったため、NSTという胎児の心音を聴く特別な機械をつけて、私の心音を確認する特別な検査をしていたそうだ。しかしその日は、トクントクンという小さな心音がしばらく続いたと思うと、急にピーという心臓の停止を知らせる電子音が何度も響いたそうだ。そのたびに母は、不安でしかたなかったらしい。その後、エコーで私の様子を確認して、このままでは命が危ないと判断したお医者様が、緊急の帝王切開手術を行い、私を取り出したという。このようなこともあり、小さな体ではあったが、私はなんとか無事にこの世に誕生することができた。しかし、呼吸がきちんとできなかったため、二週間は新生児集中治療室にある保育器の中で入院生活を送ることになった。私の生まれた六月は、梅雨だというのに、全く雨が降らず、連日三十度を超える暑い日が続いていたらしい。母は私を産んでそれほど日も経ってないのにもかかわらず、炎天下の中、私に授乳するために、毎日歩いて何度も何度も病院に通ったそうだ。そして私が無事に退院してからも、私を大きく育てなければならないという一心で、日々子育てに励んだらしい。

そして、待ちに待った一カ月検診の日がきた。母は、私がどれだけ大きくなったのかがとても楽しみだったらしいが、結果を見てショックを受けた。私は、生まれてから一カ月で、たったの百グラムしか増えていなかったのだ。お乳を吸う力が弱く、母乳をうまく飲めていなかったらしい。母は無念ではあったが、お医者様の助言もあり、母乳からミルクに切り替えたそうだ。ミルクに切り替えてからは、私の体重はみるみるうちに増え、三歳になる頃には他の子とほとんど差がないほどの大きさになったのだそうだ。人よりも寝返りも、はいはいも、歩くのもだいぶ遅かったが、それでもいっぱい食べていっぱい寝て、ここまですくすく育ったのだと、誕生日のたびに聞かされる母の涙まじりの話は、だいたいこのようなものだ。

そうして今、私は、こうして元気に何事もなく、生きている。嫌いな食べ物もほとんどなく、風邪もめったに引かない。むしろ健康すぎるくらい健康だ。でもこれは、小さな命を懸命に守り、育てようと頑張ってくれた母のおかげだ。

それにしても、あの日が検診日でなかったら、検診日が次の日だったとしたら、と考えると、私が今ここにいるのが奇跡としか思えなくなった。毎年恒例の母の話を聞いているうちに、こうして今ここに生きていること自体が奇跡なんだと、身にしみて感じられるようになった。

そして、私の名前は真生である。「真っ直ぐにしっかりと生きていってほしい」という思いを込めて、こう名付けてくれたらしい。私の名前には、家族の思いがこもっている。この名前一つとっても、私にどれだけの思いを込めて大切に育ててきてくれたかということが、よくわかるようになった。

私は、今まで自分が奇跡的な幸運に恵まれていたということや、家族の愛情に包まれて育ってきたことも、当たり前のことだと思っていたような気がする。だから、母が毎年涙ぐみながら話す内容も、心のどこかで笑いながら何となく聞き流していたような気がする。しかし、十三歳の誕生日を迎えて、改めて考えてみて、それは全て当たり前のことではないということに気付くことができた。そして、そういう周りの人の思いが、実は私がこうして毎日元気に楽しく過ごすことのできる支えになっているのだということにも気付くことができた。これからもこの思いにきちんと応えられるよう、そして思いのこもった名前に恥じることのないよう、真っ直ぐに懸命に私の人生をしっかりとかみしめるように歩んでいきたいと、十三歳になった今、強く思う。